

3年国際文化コース 秋の収穫祭

3年国際文化コースの「日本文化」の授業では、一年を通して行ってきた稲作実習の締めくくりとして、10月25日(水)に、秋の収穫祭を行いました。5月に田植えをした稲を9月に刈り取り、今回の収穫祭で炊き、おいしくいただきました。



英会話の授業で用意してきたレシピでおかずを作るということで、とても楽しみにしていました。私の班はなすとピーマンの肉炒めと卵焼きを作りました。グループの全員で協力して作ることができました。作るだけでなく片付けも同時にできたので、スムーズに作業が進みました。私たちが田植えをして稲刈りした古代米の「朝紫」を炊くときに驚いたことがあります。お米を水で洗うとき、普通は白く濁りますが、「朝紫」の場合は水が赤紫色で、米ぬかにも色がついていることが分かりました。また、「朝紫」で作られたおもちもとてもおいしかったです。
加藤七海さん(青葉中出身)

「朝紫」という品種は初めて食べる種類のお米だったので新鮮でした。また、自分たちで田植えし稲刈りしたお米を食べる機会はないかもしれないので、貴重な体験でした。自分たちでご飯に合うおかずを考えたり、作り方を調べたりして、自分たちだけで一から準備をすることができました。実際、班では役割分担しなくても各自で何をすべきか考えて行動できていたと思います。椋本さんが作られたおもちもすごくおいしかったです。この実習で炊飯器の使い方や「朝紫」のお米のおいしさを知り、お米に合うレシピを考えたりするなど、本当に良い体験ができました。
川中遼さん(若湊中出身)

スピーチコンテストに 出場しました!

10月21日(土)に、西舞鶴高校で行われたスピーチコンテスト北ブロック予選に、本校から本田琴音さん(川口中出身)と沓澤瞳さん(白糸中出身)が出場しました。自分の思いや体験を英語で表現し、多くの前で発表する貴重な体験ができました。



本田さんの発表の様子

沓澤さんの発表の様子

ハロウィーンのイベントを 行いました!

毎年恒例となっている英語科のハロウィーンのイベントを今年も10月30日(月)に行いました。英語科の先生に“Trick or treat!”と声をかけ英語でコミュニケーションをとると、お菓子がもらえるというイベントです。今年もたくさんさんの生徒が参加しました。



AETの先生が仮装してハロウィーン気分を盛り上げてくれました!

夏季休業中留学体験報告 No. 2

今回は、オーストラリアのアデレードへ留学した上米れもんさん(白糸中出身)の留学体験を報告します。

1. どのような研修でしたか。

オーストラリアのアデレードに17日間行ってきました。現地の学校に通って英語で授業をしたり、市内見学に行ったりしました。

2. どのようにして留学の準備をしましたか。

去年留学を体験された先輩方にお話を聞いたり、家でオーストラリア英語を学んだりして留学に向けての準備をしました。

3. 最も印象に残ったことは何ですか。

オーストラリアでの学校生活です。日本とは校則や文化が違うところが多くてとても驚きました。

4. 今後がんばりたいことは何ですか。

今回の経験を活かして積極的に国際交流をしていきたいです。また英語の授業ももっとがんばりたいです。

5. 東高生に伝えたいこと

留学に行く前は少し不安に思っていたけれど、留学で特別な体験ができてとても良い思い出となったので、みなさんも少しでも興味があればチャレンジしてみてください!



アボリジニ文化のフーメラン

Namaste ~ネパールからの手紙~

昨年度から、青年海外協力隊員としてネパールでボランティア活動をされている英語科吉積勇人先生からのメッセージをお届けします。

皆さんナマステ。日本は徐々に寒くなっている頃でしょうか?

ネパールでは乾季の訪れとともに、ダサイン、ティハールという一年で最大の休みが始まりました。日本でいうところのお正月といった感じで、街は賑わっています。

そんな休みの中、私はリフレッシュを兼ねてトレッキングに行ってきました。

トレッキングと聞くと、簡単な山歩きのように聞こえるかもしれませんが、最終到着地点の標高は4200メートルで、富士山より高い場所まで歩いて行ってきました。

ネパール最大の魅力はやはり最高峰であるヒマラヤ山脈であり、トレッキングに関するビジネスも中々特徴的です。

ネパールでは800メートルから標高を上げるにつれて、住んでいる部族が変わります。町の中心地にはカーストが混在しますが、上になるにつれてグルンと呼ばれる山岳民族の村になります。生活様式や衣装が異なることは勿論ですが、驚くべきは彼らの身体能力です。トレッキングに際してガイドとポーターを雇うのですが、今回は2人共グルン族でした。彼らは、低酸素状態になり私が息を切らし、休憩に休憩を重ねて歩く中、息ひとつ切らすことはありませんでした。他のガイドに至っては4200メートルまでビーチサンダルで歩いている人もいました。生まれながらにして4000メートル級の場所に住み、満足な道も無い地域で生まれ育った彼らにとっては余裕なようでした。ガイドも凄いのですが、ポーターに至っては20~30キロある荷物をドコと呼ばれる籠に入れ、頭で紐を担ぎ登ります。彼らにはリュックを担ぐ文化は無く、ドコで農作物からプロパンガスまで運びます。

彼らの助けを得て頂上で見た景色は最高でした。やはり4200メートルまで登っても、さらに高い8000メートル級の山々に360度囲まれる景色は一生忘れられない思い出になりました。

写真はABC(アンナプルナベースキャンプ)からの景色とポーターの写真です。

ラタ フェリベトン(では また!)



「国際だより」は上のQRコードからもアクセスできます。